

T・A・シービオク『動物の記号論』、池上嘉彦 編訳、勁草書房。1989

【要約】

1 動物とは何か

(“What is an Animal?”, 1985 年の講演のテキスト)

シュレーディンガーは生物は自ら秩序を生み出すとした。生物はエントロピーという物理法則に従い、また記号論が生命の理解につながることから、生物は物理的・情動的な変換プロセスを結びつけると考えられる。全ての生物は環境の発する記号の影響を受ける(記号現象)。共生も記号現象の一形態で、互いに情報を送り合う「会話」である。人間と動物の関係は様々な形をとるが、その中で動物がとる行動に記号を見出せることもある。

2 動物のコミュニケーション

(“Animal Communication”, Perspectives in Zoosemiotics(1972)より)

・序論

パスによって体系化された記号論は、モリスによって純粹記号論・記述記号論・応用記号論に三区分された。その後動物行動学と結びついた動物記号論が拡大してきた。

・コミュニケーション・ネットワークのモデル

ビューラーのコミュニケーションモデルは、送り手がメッセージをコード化し、それがノイズを含みながら受け手にたどり着くというもので、メッセージにはコンテキストと経路が必要である。人間はコンテキスト、動物は受け手と経路への方向づけが重要となる。

・経路の役割

動物の記号を解読するにはその手段を特定しなければならない。経路には音響や視覚、触覚の他にエネルギーや物質などがあり、動物によって組み合わせが異なる。

・送り手と受け手

動物のコード解読には遺伝的に決まった反応(閉じたもの)と個体の経験によるもの(開いたもの)がある。動物が命令や呼びかけをしているのか、対話をしているのかは議論があるが、受け手のいない行動は稀なので後者と考えるもよい。

・コードとメッセージ

動物が使うコードは経路や両者の距離によって決まる。例えば相手が見えなければ鳴き声、距離があるときは姿勢やしぐさ、近くなれば触覚を使う。動物は鳴き声の頻度のように多少を用いたコードを多く使う。これは行動の個別化、個体群の分化に役立つと考えられる。また、動物がメタコミュニケーション的なメッセージを使うこともある。

・コンテキストの役割

共同体の中では自身の情報を発する必要がある。「動物意味論」はコンテキストを分析したがそれは未熟で、意味論そのものの未熟さを明らかにした。「動物実用論」的なアプローチ

ちも不十分で、観察者が反応の違いを見分けられるかどうかが問題になる。場面によって意味が変わる「転換詞」は動物も用いるが、コンテキストを理解しなければ分析できない。

・ 結論

動物記号論では二つのモデルが構築される。一つはメッセージが受け手の元にどのような形で運ばれるかを規定し、もう一つは動物がコードをどう利用してメッセージを認識するかを規定するモデルである。最終的には情報の選択過程の分析を目指すことになるが、この研究はまだ不十分である。動物記号論は言語の起源と本質の研究にも寄与するだろう。

3 動物と「話す」——動物記号論解説

(“Talking with Animals”, The Play of Musement (1981)より)

動物記号論は動物の記号と人間の非言語的コミュニケーションを扱う。動物のコミュニケーションは同種間、異種間の二種類に分けられる。メッセージを伝えるのに用いるコードは発信者と受信者の間で共有されていなければならない。また動物の発する信号は発信より大きなエネルギーを放出させることがあり、これは動物のコミュニケーションの重要な原理になっている。記号は経路によって分類できる。人間は聴覚をよく使うが、他の動物は人間には使えない経路を使うことが多い。

動物記号論の主要なテーマには次のようなものがある。メッセージの連続的な形成と記号化、メッセージの伝達経路、連続的なメッセージの解読・解釈、メッセージのレパトリー、コードの種類、コンテキスト。また記号体系の進化や個体における記号体系の発展も重要な研究分野である。

4 信号行動の進化におけるコード化

(“Coding in the Evolution of Signalling Behavior”, Perspectives in Zoosemiotics (1972)より)

・ デジタル的・アナログ的コード化

情報を伝える手段にはデジタル的なもの、アナログ的なものがある。前者は信号の有無、後者は多少を示すことで機能する。ノイマンによると、脳などはデジタルとアナログの間を行き来しているという。ここでは人間以外の種はアナログ、人間は両方を使って情報を伝達するという仮説を中心に論じる。

・ コミュニケーションの経路

人間は聴覚と視覚によってメッセージを伝える。触覚や嗅覚などは他の動物と異なり意識的に利用するため、信号の操作も重要な要素となる。コミュニケーションのモデルで最も一般的なものは経路を通じて送り手が受け手に干渉するというもので、同一の個体が両方の役割を果たすこともある。

・ 情報理論のモデル

ビューラーのモデルによれば、発話行為は発信源の特徴づけ、受信源への働きかけ、

指示対象を指すという三つの特性を持つが、これにコードとメッセージ、経路を加えることでコミュニケーションのネットワークの情報理論的モデルとの関係が見出せる。この六つの要因は言語機能の序列を決定する。クローバーは記号と象徴の区分について、前者は個体の注意を別の個体に向けさせ、後者は対照的に生体の状態以外の情報を運ぶものとする。

・コミュニケーションの六機能

上に挙げたような二分法的モデルは過度に単純化されているとも言える。少なくとも四つの機能を取りこぼしている。それらはマリノウスキーの言う「交話的交感」と受け手への方向づけ、メッセージ自体を指向する詩的機能、そして注釈的機能である。これら六機能のうち感情的機能、交話的機能は人間以外にもあらわれ、認知的機能と働きかけ機能もおそらくあらわれるが、詩的機能とメタ言語的機能は人間に特有と思われる。

・感情のコード化

スタンキューヴィッツは人間は話すことも黙ることもできるとする。また人間は話すメッセージを自由に選べる。話す内容についての態度は感情によって変えることもできる。鳥類も発声と沈黙を使い分け、メッセージを選択できると考えられている。言葉は一時的であり、嗅覚のように遅延したフィードバックが可能な(=書き言葉的な)信号とは異なる働きを持つ。

・言語の表出的特徴

ダーウィンは『人間と動物における感情の表出』の中で音声の発信を「しごく不明瞭な問題」としており、その後のサピアやヤコブソン、ハレも音声の解明をなしていない。バイイら言語学者はコードに対するメッセージの優先と審美的な優越性を強調したが、構造言語学ではごく少数の学者が音素レベルで表出性の概念に触れた程度で、またトルベツコイはこの分野のデータは信頼性に欠けるとして別の分野で扱うことを提案している。言語学や心理学によって近年言葉の研究が始まった。ロツツの類型は社会的に決定されたものや、身体特性や言葉の習慣による制約に加え、可変的な実用論的特徴を含んでいる。また言語学者と心理学者の集団によって二分法的な分類も提案された。こういった特徴の類型化と共に、異種間の分類もまた必要になっている。一部の動物のコミュニケーションには個体ごとの差異もあるが、これは学習することで身に付き、共同体の「方言」になることもある。表出的またはパラ言語的現象におけるコード化はアナログ的である可能性がある。表出的な特徴は体系によって条件づけられたもので、言語の一部とみなせる。

・離散的対連続的アプローチ (p. 80~)

このような特徴を多くの言語学者は重要視しない。アナログ的な連続性を認める分野は意味論と音声学であり、前者では複雑な意味構造、後者では表出的要素が科学の対象にならないことを理由としている。心理学の影響を受けた言語学者や言語学者と心理学者の共同論文では、連続的なアプローチを許容している。専門家の間では重要性を認めることで価値が認められていくという意見があり、意味論的にも段階性の重要性が認められている。

論理学では記号と意味のつながりは恣意的とされているが、その恣意性はデジタル的な構造化の論理的帰結という点で注目すべきである。数学者マンデルブロットは言語記号が離散的なのは連続的な音声によって「運ばれている」からで、連続的な現象は言語変化をとらえるのに不可欠であり、また構造上の「内在的通時態」は離散性が確立していないことが前提であるとしている。進化論の観点からは、アナログ的メカニズムは突然変異を発生させたと思えるが、デジタル的メカニズムは後の段階で発生し、多くの情報を走査し統合するために発生したと思われる。

5 芸をする動物—その芸の秘密 (ジーン・ユミカー・シービオクとの共著)

(“Performing Animals”, Psychology Today, Nov. 1979 より)

「話をする動物」は珍しいものではないが、十三年前にチンパンジーに行った試みは失敗しており、人間だけが言葉を話す結論付けられた。人間は条件付けか調教によって動物を手懐ける。前者なら訓練士との交流が重要になる。調教された動物の芸はパートナーの人間によって出来栄えが変わり、猿が人間の言語を使う場合にも同じ傾向が見られる。しかし訓練士との交流が学習に良い影響を与えることも分かった。

実験の際人間の影響を極力排除すると、猿の言語能力に疑念が生じてきた。人間を実験から完全に排除することは困難であり、この問題の解決は難しい。また猿が人間と同じように世界を認識しているかも不明であり、人間と猿の真のコミュニケーションは遠い。

6 日本の猿まわし—復活した古典芸能

(“Performance of the Japanese Monkey”, Explorers Journal, No.1, March, 1981 より)

猿の芸はインドと中国でおこり、日本に伝わった。日本では猿は聖なる動物とされていたため、祭礼の際には猿回しが行われた。初めは宗教的な舞踊だったが中世以降は能など他分野に進出した。太平洋戦争が終わると伝統が途絶えたが、やがて復興が始まった。

猿の調教には人間にも猿にも桁外れの努力が必要だったが、現代の方法はその手間を大きく省いた。訓練の前には人間がボス猿の役割を演じる。その後罰や身振りや手振りも必要なくなり、言語による意思疎通ができるという。言語命令に伴う体の動きや猿をつなぐ紐や鞭によって猿に命令が伝えられる。

このような記号学的な現象を研究することで、日本の文化の記号作用をより深く理解することができるようになる。

7 芸術の「予表」

(“Prefiguration of Art”, The Play of musement (1981) より)

・まえおき

人間だけが言語を持ち、言語芸術を独占していることが人間を他の動物と区別している。しかし、他の動物のコミュニケーション体系にも美的機能が付加されうるのではないか。ニコラ・プサンは「芸術の目指すところは魅惑である」と言い、パノフスキーは「芸術作

品というものは常に美的意義を有している」と言ったが、実用的、あるいは生物学的な目的が関わっていても同じである。「動物が現にわれわれが観察するような行動のいくつかを行うのは、そこから生じる結果を彼らが経験として楽しんでいるからである」という可能性もある。バルトは記号学者は文字も絵も同じやり方で扱えると主張したが、全ての記号は伝える情報の種類と密接に結びついていると思う。ソ連記号学の「第二次モデル化体系」も、異なる芸術的実現形態を混同していると言える。

言語芸術は右脳、非言語芸術は左脳で生じるが、両者は相補的な関係にある。言語的・非言語的コードという二つで一組のコミュニケーション・コードを使えるのが人間の独自性である。非言語記号は言語にとって代わられた訳ではない。記号現象の分析は形態と機能の相互関連を示すのが理想的だが、芸術のような複雑なものの進化の順序を把握するのは難しい。問題は言語を持たない他の種の「美的享受の記号」を認定することである。猿や類人猿といった高等動物の美意識に関する研究はいくつかあり、レンシュは動物にも人間のような美的感覚があるとした。

ここからは動物が持つと思われる美的性向について考える。特に身振り記号、音楽的記号、絵画的記号、建築的記号の四つの分野に注目する。

・身振り記号

サックスは鳥の表示行為について言及したが、これを「ダンス」と呼んだのは単なる比喩なのか、それとも人間と同じ系統を持つといったもっと深い意味があるのかという疑問が生じる。系統と伝承の区別は必要だが、それは明確でない。

チンパンジーがダンスをしたという事例がある。ポーズによるダンスの規定によればこれは人間のものと同類であり、また共通の起源を持つとも考えられる。しかしダンスが内在的なものか、獲得されたものなのかは分からない。情報はいくつかの異なる方法によって次の世代に伝えられるが、その過程で異なるものが合体することもある。表出的な動きの場合は適応の理由が環境に対する反応に限らず、規定の難しい圧力も関係してくるため調査が難しい。しかし人間のダンスが他の動物のものとは違うと思う一方、系統発生的、個体発生的な進化によるものだとも確認している。

・音楽記号

音楽のルーツは鳥にあると考えられ、鳥をはじめとする動物には美意識があるとも考えられている。多くの鳥は調べを伴奏と区別して取り出すような、異なる聴覚的線条（ポリフォニー）を区別する能力を持っている。しかし「歌う」という概念は明確に定義されていない。他の動物ではザトウクジラや類人猿が動物の「歌」における有力な例である。ただし霊長類の「歌」の効用は不確かであり、研究には時期尚早である。

・絵画的記号

調査を進めると、動物が芸術を楽しんでいるとは考えづらく、芸術は重要でないというパラドックスに直面する。しかし芸術を内的環境を外的環境と均衡させる仕組みと考えれば動物にも美的感覚が認められる。実験によって猿には人間のような美的感覚があること

が示された。またシラーは類人猿の描いたものは幼児の殴り書きになぞらえられるとした。人間の芸術には様々な動機があり、類人猿が絵画を利用したり発展させなかったのはなぜかという問題が見える。言語能力でも同じことが言える。後者の答えはまだ出ていないが、前者は言語記号によって非言語的な芸術が現れたためとモリスは主張する。ハンフリーは猿の好みを調べる実験を行い、刺激は「純粋に快感の故」(美意識)にも、「純粋に興味の故」(新奇さが薄れると無関心になる)にも注目されるとした。快感や構成の原理は人間の芸術の予表が猿を通して理解できることを示唆している。

・ 建築的記号

動物の住まいには芸術性が見られる場合があり、この美的な構成要因を探り出すことは「芸術とは何か」という問いに等しく、必要なことである。

動物は周りから住居の素材を集めるが、これは美的な性格と言える。建築には人間と同じ技術が使われる。動物の建築行動は道具使用行動の一つと考えられる。動物が道具を使うことは建築行動のさきがけではないだろうか。類人猿は道具を使えるが優れた建築技術は持たない。人間と動物の行動の関連性は動物の建築から考えることができるが、建築の予表も文化以前の段階での非言語芸術の一つにすぎない。

・ 結論

インプットとアウトプットの処理に関して言語的・非言語的パターンの中に差があるということは、右脳と左脳の違いによって説明される。そのようなパターンに進化の上で先行するものも明らかにされてきてはいるが、周辺部はまだ不明確である。動物の行動を考察する際は人間が解釈をゆがめてしまうことに注意すべきである。

この論文では美的意義を実用性と対比して考察した。動物に意識があるのかという問題はあるが、一部の動物が美的な動機づけによって行動するように見えることは多くの生命科学者の間で意見が一致している。また自然の有機的な美と人工的な美的な美が区別されることがあるが、両者は明らかに相互に関連し合っている。人間による世界の見方は人間の価値観に支配され、その中で様々な規定がなされ、そうして記号体系は美的な傾向を帯びる。ホプキンスの言う「平行性」は動物の芸術に共通する、普遍的で中心的な手法である。ダンス、音楽、絵画、建築のいずれでも安定性が破られることで実用性と美の拡大像が生まれる。ホプキンスは「美的な好みは動物や人間が自らの回りの世界の対象を分類することを学習することができるような経験を求めるという性向に由来している」とする。分類を行うということは動物も記号内容を生み出していることになる。そしてそこには美的な意味合いを見出せる。子供の分類の仕方から分かるように、人間は成長して認知能力が発達して初めて複雑な芸術を扱えるようになる。

芸術作品を人工物(意味するもの)、美的対象(それが意味するところのもの)、意味されるものに対する抽象的、コンテクスト志向的な関係からなる自立的な記号として特徴づけると、それが支持する虚構的な分断をあいまいにしかねない。

・感想など

発表が始まる前に使ったテキストに興味を持ちこの本を使うことにしたが、非常に興味深い内容だった。テレビなどではしばしば人間のように振る舞う動物が取り上げられるが、本当に意識してあのように行動しているのか疑問に思っていた。動物は人間のように言葉を使って意思を伝えることができないため、動物がどう考えて行動しているかは人間には分からない。動物の行動を研究するにはこのことを念頭に置く必要があるが、それでもこの本で著者が主張することには何度も納得させられた。今は真実が分からなくても、研究を続けていけば確実に答えに近づけるはずである。この分野の研究には多くの困難が伴うが、いつか真実にたどり着くと信じたい。

動物に興味のある人は多いと思うが、研究対象として動物を見る人は少ないだろう。科学や医学は多くの人々の注目を浴びるが、その一方で関心を持たれにくい分野もある。私自身もテキストを読むまで「動物記号論」の存在を知らなかった。今回の発表は自分の視野を広げ、興味の幅を広げることにつながったと思う。この経験を今後にかし、様々な価値観に触れていきたい。